

## ジョルジュ・バタイユと雑誌

長井 文

ジョルジュ・バタイユが図書館員として働いたかわら文筆活動を行っていたことはよく知られている。それはこの作家を説明する枕詞のように繰り返されてきた。バタイユが初めて実名で学術論文の範疇をはみ出る論考「アカデミックな馬<sup>1</sup>」を発表してから1年も経たぬうちに、ブルトンは「シュルレアリスム第2宣言」で、バタイユのことを「昼の間は古びた、ときに魅力的な写本に図書館司書として思慮深い指をすべらせ<sup>2</sup>（彼〔バタイユ〕が国立図書館でそうした仕事に従事しているのは周知の通りである）、〔…〕夜は汚物を堪能するのである<sup>3</sup>」と描写している。またジャン＝ポール・サルトルは、『『内的体験』でバタイユが説く「自己喪失」を欺瞞だと切り捨て、「というのも結局のところバタイユ氏は文章を書き、国立図書館で就業し、本を読み、セックスをし、ものを食べているのだから<sup>4</sup>」と述べている。サルトルがこの論文を発表した年は、バタイユが肺結核のため国立図書館に勤務していなかった時期だが、いずれにせよ国立図書館勤務の公務員というバタイユの職業<sup>5</sup>と、何らかの価値体系への依拠を認めないバタイユの思想から生まれるギャップは、バタイユを揶揄する格好の材料となったのである。

<sup>1</sup> Georges Bataille, « Cheval académique », *Documents*, n° 1, avril 1929, in *Georges Bataille Œuvres complètes*, t. I, Gallimard, 2004, p. 159-163. 本稿では以後バタイユ全集を *O.C.* と略記する。

<sup>2</sup> フランスでは図書館は美術館・博物館と同じ範疇に含まれるため、書籍のみを扱う日本の図書館司書とフランスのそれとは業務内容や資格取得のプロセスが異なる場合がある（西野嘉章『博物館学 —— フランスの文化と戦略』、東京大学出版会、1995年、5-6頁）。当時のバタイユは学芸員 *conservateur* の資格は持たない図書館司書 *bibliothécaire* であったが、いずれは学芸員に昇格するはずの職員とみなされており、国立図書館が所蔵する古銭やメダルの管理や研究に従事する学芸員の性格の強い業務を行っていた。

<sup>3</sup> André Breton, « Second manifeste du surréalisme », *Révolution surréaliste*, n° 12, décembre 1929, in *André Breton Œuvres complètes I*, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1988, p. 826。「アカデミックな馬」が発表されたのは1929年4月、「シュルレアリスム第2宣言」が発表されたのは同年12月である。これはバタイユに関する最も古い言及である。

<sup>4</sup> Jean-Paul Sartre, « Un nouveau mystique », *Cahier du Sud*, 1943, in *Critiques littéraires (Situations I)*, coll. « folio essais », Gallimard, 2000, p. 163.

<sup>5</sup> 日本の図書館司書や学芸員は地方公務員だが、1990年に新法令が公布される以前のフランスの学芸員は、グランゼコール卒業以上の学歴がなければなれない、国家総合職に分類される国家公務員だった（西野嘉章、前掲書、15-17頁）。

休職期間を挟みつつも、図書館での職を終生手放さなかったバタイユに、「雑誌の人」という第3の顔が付け加わるのは1940年代後半以降のことである。1951年に放送された「あなたは誰？」というラジオ番組で、司会のアンドレ・ジロワに「もし他のことをするとしたら、どんな活動をするか」と尋ねられたバタイユは、「いま自分がやっていることのほかに何が出来るのか、よく分かりません。私の本職は…図書館員で、本も書いていて…」と答えている<sup>6</sup>。作家として呼ばれた場で、言いよどみながら自分のなりわいは図書館員だと明かしたバタイユは、とはいえ勤務地の変更は可能などと図書館の勤務事情を続けて話そうとする。するとジロワはすかさずその言葉を遮り、「そして雑誌の運営もなさっていますね」と話題を変えてしまう<sup>7</sup>。結局、雑誌の話はこれ以上ふくらむことはなく、バタイユがジロワの言葉を肯定しただけで終わってしまうが、司会者によるこうした誘導は、バタイユに当時雑誌の主宰者というイメージがあったことの証明となるだろう。

バタイユと雑誌という結びつきが一般的になった背景には、1945年にバタイユが企画し、1962年にその生涯を閉じるまで責任者を務めた雑誌『クリティック』（1946-）の成功がある。創刊前の『クリティック』が目指していたのは、歴史、科学、哲学、テクノロジーといった知の領域を横断的に網羅した、書評で構成される総合情報誌であった<sup>8</sup>。書物のまとめではない、本格的な批評を掲載するという点と、本屋の店主など限られた購読者を対象にした専門誌ではないという点で、『クリティック』は『ビュルタン・クリティック・デュ・リーヴル・フランセ』や『パリュ』といった、既存の書評誌と一線を画す雑誌になるとバタイユは考えていた<sup>9</sup>。内容よりもその分野における新しさを基準に書評作品を選ぶという方針や、執筆者たちの主張を統制しないその姿勢は<sup>10</sup>、実存主義や人格主義といった、なんらかの主義主張を標榜し、執筆者たちがゆるやかな連携を保っていた競合文芸・思想誌『レ・タ

---

<sup>6</sup> Georges Bataille, « Qui êtes-vous, Georges Bataille », *Georges Bataille, une liberté souveraine*, Farrago, 2000, p. 89. このインタビュー番組は現在インターネット上で視聴することができる。

<sup>7</sup> Georges Bataille, *Georges Bataille, une liberté souveraine*, *ibid.*, p. 94.

<sup>8</sup> Pierre Prévost, *Pierre Prévost Rencontre Georges Bataille*, Jean-Michel Place, 1987, p. 123-124.

<sup>9</sup> Pierre Prévost, *ibid.*, p. 125.

<sup>10</sup> とはいえ実状はそこまで放任主義ではなく、論文に書かれている政治的立場や寄稿者の選定をめぐる、バタイユと初代副編集長だったプレヴォは何度も衝突している。Pierre Prévost, *ibid.*, p. 128-132.

ン・モデルヌ』(1945-)や『エスプリ』(1932-)とは異なる色彩を出すことに成功し、『クリティック』は頭角を現していくことになる。

『レ・タン・モデルヌ』が平均で12000から14000部(サルトルが寄稿した号は16000から18000部)、『エスプリ』が10000から13000部の発行部数を誇っていた1945年から1960年にかけて、『クリティック』の平均発行部数は3000部と少なく<sup>11</sup>、商業的には苦戦を強いられたが、その内容は高い評価を受けた。『クリティック』が最も輝いていたのは、おそらくバタイユの死後、フーコーやデリダ、バルトといった気鋭作家たちが同誌にさかんに登場した1960年代後半以降だろうが、とはいえ創刊から2年後の1948年に、『クリティック』はジャーナリストが選ぶ年間最優秀雑誌賞を受賞している。また、1951年以降はフランス国立科学研究センター(CNRS: Centre National de la Recherche Scientifique)、フランス国立文学振興基金(CNL: Caisse Nationale des Lettres)、フランス国立書籍機構(CNL: Centre National du Livre)といった公的 성격の強い機関の援助を断続的に受け、現在まで発行を続けている<sup>12</sup>。

バタイユに雑誌人というイメージが付与される大きなきっかけとなったのがこの『クリティック』であることは疑いようがない。しかしその一方で、バタイユの関わった雑誌が『クリティック』の他にも複数あったことも事実である。実際、本気とも冗談ともつかない話まで含めれば、創刊時にバタイユの名が挙げられた雑誌は10タイトル近くに及んでいる。

本稿では、そうした事実に注目し、バタイユと雑誌の関わりを検討していく。この作家にとって雑誌がいかに重要なメディアであったかを明らかにすることが、本稿の目的である。なお、フランス語で雑誌を表す言葉は「journal(ニュース性の濃い時事的な記事を掲載する日刊紙、週刊誌、月刊誌のこと。発行頻度は問わない)」、「hebdomadaire(週刊誌)」、「revue(専門性の高い月刊誌)」、「bulletin(学会など公的組織が発行する論文雑誌や報告書)」、「cahiers(おもに研究誌や文芸誌、ときに論文集も含まれる)」、「magazine

---

<sup>11</sup> Sylvie Patron, *Critique 1946-1996*, IMEC, 1999, p. 6.

<sup>12</sup> Sylvie Patron, *ibid.*, p. 16-23. パトロンが作成した年表では、この雑誌は1961年以降もフランス国立文学振興基金の援助を受けているかのような書き方がなされているが、1961年1月から1977年7月にかけての『クリティック』の表紙には、同基金の助成金を受けている旨の文言が外されている。しかしこの表紙の記述はいい加減で、2003年12月までフランス国立文学振興基金の助成を受けているとの記載があるが、同基金は1993年にフランス国立書籍機構と改名している。表紙の記述を信じるならば、『クリティック』は10年もの間、消滅した団体から資金援助を受けていたことになる。

(商業的意味合いの強い、多くはイラスト入りの雑誌)」など多岐にわたるが、本稿ではそれらすべての総称である「*périodique* (雑誌、定期刊行物)」に分類できる定期刊行物を「雑誌」と見なし、考察対象とする。

## 最初の雑誌

1924年暮れに、バタイユは出会ったばかりのミシェル・レリスと雑誌を作ること考えた。これがバタイユが雑誌創刊を試みたという一番古い記録である。「シュルレアリスムその日その日」という1951年頃書かれたシュルレアリストたちとの交流回想録には、このときのことが書かれている。

私はまず、ミシェル・レリスと知り合った。彼とは1924年の終わりに出会った。彼は、私と同じく国立図書館の司書であったジャック・ラヴォの友人だった。私たちは一時期、3人で文学運動を立ち上げようとしたことがあった。とはいえ文学運動については、私たちはかなり漠とした考えしか持っていなかった。思いつくのはカクテルを飲んだ夜のことである。私たちは、サン＝ドニ門の近くの通りにある小さな娼館のカフェへ行った。私たちのうちのひとりが、この娼館のことを聞いていたのだ。それは良心的な気の置けない娼館で、私たちはかなり飲んだ。へべれけになるまで飲んだ私は3人の中で一番酔っぱらっていた。私たちの話題に、女たちのうちのひとりが加わっていた(陽気な感じで関心を示しはしていたが、居心地は悪そうだった)。覚えているのだが、その時の話もその突拍子のなさも、間違いなく毒にも薬にもならない、さして重要でないものだった。しかしその時、その突拍子のなさは、それにコロリと魅惑されてしまった者たち、つまり私たちを感嘆させたのだ。それは良識的な世界に終止符を打つようにも見えた。私たちの目には、「運動」の目鼻はついているかに映った。残るのはただ、自分たちの話をいくつか刊行することだけだった(酔っていたが、私はそれらをメモしておいた)<sup>13</sup>。

ひそかに文章を書いていた作家志望の若者が、同じように駆け出しの作家と出会って意気投合し、酒を飲みながら文学談義で盛り上がる。この後に引用するレリスの言及と比べると、バタイユの話は漠然としていて、肝心の文学運動の内実は何も分からないが、この文章からは当時の楽しいな雰囲気伝わってくる。娼婦の気詰まりな様子が暗に物語る、部外者の無理解によって増幅される共犯の感情や、酒が入ることでより勢いを増す無鉄砲さ。そうし

---

<sup>13</sup> Georges Bataille, « Surréalisme au jour le jour », *Change*, n° 7, 1970, in *O.C.*, t. VIII, 2002, p. 170.

た若い輝きがこの夜には満ちている。いっぽうのレリスの証言は、バタイユよりずっと冷静にこの運動の具体的な姿を伝える。

ダダの精神も御眼鏡にはかなわず、彼〔バタイユ〕は一切の事柄の恒久的な受諾を意味する肯定運動を興す時機について語っていた。この運動は、徹底して挑発的な否定に備わる子供っぽさを免れているという点で、すでに立ち上げられていたダダの否定の運動に優るものになるはずだった。私たちがしばしのあいだ温めていたが、結局実行に移さなかった計画に、雑誌を創刊するというものがあった。そういう意味では私たちは、親交を結んでから文学その他について共通する意見を見出した、若い知識人たちと大して変わらなかった。この計画の特異な点は、雑誌の発行場所を、可能ならサン＝ドニの古い界限にある一軒の娼館に、夜の散策の折にわれわれが足を向けた、そのかなりの老朽ぶりが私たちを魅了した店にしようとしたところである。当然のなりゆきで、私たちはその娼館で働く女を雑誌に参加させようとしたらしい。というのも、12月24日付で私は——刊行できるか定かでないこの出版話のために——ふたりの娼婦が話してくれた夢を書き残していたからである<sup>14</sup>。

斟酌しながら書き留めたというバタイユのメモは残っていないが、レリスの日記には、このときの女たちの話がたしかに記録されている<sup>15</sup>。

興味深いのは、二人の作家が雑誌創刊をさも容易に出来ることのように考えている点である。当時のレリスは、その年のはじめに詩を発表したばかりの駆け出しの作家であり、バタイユにいたっては、生前の作者がその存在を明らかにすることのなかった若書き『ランスの大聖堂』（1918）を除いて、いかなる作品も発表していなかった。ほぼ何も書いていない時期に、文学運動や雑誌を立ち上げようとするとは一体どのような見なのかと問いたくなるが、バタイユは文学運動のめどがついたなら残るは出版するのみと、雑誌を文学運動に当然のように付随するものであるかのように言っている。いっぽうのレリスも、仲間と雑誌創刊をもくろむのは、当時の若い作家たちにとってはごく普通のことだったという考えを示している。創るにせよ書くにせよ、雑誌は当時の若い作家にとっては非常にアクセスしやすいメディアだったのだろう。雑誌創刊に対するこうした気負いのなさが影響しているのか、以後バタイユは次々と雑誌の運営に携わることになる。雑誌はこの作家にと

---

<sup>14</sup> Michel Leiris, « De Bataille l'impossible à l'impossible Documents », *Critique*, n° 195-196, 1963, p. 686, in Georges Bataille, Michel Leiris, *Georges Bataille Michel Leiris Échanges et correspondances*, Gallimard, 2004, p. 16.

<sup>15</sup> Michel Leiris, *Journal 1922-1989*, Gallimard, 1992, p. 87.

ってその後も非常に重要な媒体であり続け、結果的にバタイユは生涯を通して 330 本を越える記事を雑誌に寄稿することになるのである。

## バタイユの雑誌遍歴

以下ではバタイユの執筆期間をバタイユが初めて雑誌の創刊を考えてから 1930 年代前半までの時期、1930 年代後半から第 2 次世界大戦前夜までの時期、そして最後に第 2 次世界大戦勃発以降という 3 つの時代に区切り、この作家が創刊を計画した雑誌を核にして、各時代にバタイユがどのような雑誌を考案し、どのように関わっていたのかを見ていきたい。

### 1930 年代前半まで

1924 年末に文学運動の機関誌創刊の話が立ち消えになってから、バタイユは作家としての活動をなかなか始動させない。レリスの依頼に応じてバタイユは、1926 年 3 月に『シュルレアリスム革命』第 6 号に中世のナンセンス詩の翻訳を掲載するが<sup>16</sup>、これは無署名の記事であり、仲間うちではともかくこれをもってバタイユが作家として認知されることはなかった。また 1928 年には、彼の著作のなかで最も多くの版を重ね、最も読まれているであろう『眼球譚』を出版するが、この作品の初版本の発行部数は 134 部と少数で、しかも筆名を使つての出版だったため、世間的な反響は無に等しかったはずである。1920 年代のバタイユが世に出していたのはむしろ「本職」である古銭学の論文が主である。国立図書館の古銭・メダル展示室<sup>17</sup>でのバタイユの先輩同僚にあたるジャン・バブロンとピエール・デスペゼルが編集長を務める古銭専門誌『アレチューズ』に<sup>18</sup>、バタイユは 1926 年 7 月から 1929 年 1 月にかけて論文や書評を寄稿していた。

結局、バタイユが実際に雑誌創刊の一端を担うようになるには、1929 年まで待たねばならない。バタイユは 1929 年 4 月に創刊される『ドキュマン』の立ち上げメンバーのひとりとなり、雑誌創刊後は事務局長<sup>19</sup>という役職でこ

---

<sup>16</sup> Georges Bataille, « Fatrasies », *Révolution surréaliste*, n° 6, 1926, in *O.C.*, t. I, *op. cit.*, p. 103-106.

<sup>17</sup> この展示室の特異な性格については『フランス文化辞典』の「古銭学」の項目を参照のこと。『フランス文化辞典』、丸善出版、2012 年、171 頁。

<sup>18</sup> バタイユの古銭学論文に関しては拙論を参照。Aya Nagai, « Bataille numismate -- continuité ou rupture ? -- » 『仏語仏文学研究』、東京大学仏語仏文学研究会、39 号、2009 年、183-197 頁。

<sup>19</sup> 事務局長 *secrétaire général* は現在では政党や団体の事務を担う部門のトップを指す

の雑誌の編集権を握ったが、この雑誌は自分たちが興した文学運動の機関誌といった威勢のいいものではなかった。この雑誌は「マガジン」という商業的意味合いの強い自己規定とは裏腹に<sup>20</sup>、編集委員を学者や美術館の学芸員で固めた、学術的見地から見て有意義な論文が並ぶ雑誌になるはずだった。後述するが、バタイユはこうした予定を反故にし、『ドキュマン』をまったく違った雑誌にしてしまう。

ところでこの雑誌の誕生を準備したのもまたひとつの雑誌であることは、これまであまり指摘されていない。1928年にパリ装飾芸術美術館でプレ・コロンビア美術展が開催された際に、『カイエ・ド・レピュブリック・デ・レットル・デ・シアンス・エ・デ・ボザール [フランス共和国文芸科学芸術手帖] <sup>21</sup>』という雑誌が特集号を刊行するのだが、この雑誌に集結した面々が、美術、考古学、民族誌学というあまり目にする事のない組み合わせのテーマを掲げた雑誌の創刊を思いついたのである。1929年次第4号以降、これに「雑録」というテーマが付け加わると、『ドキュマン』の誌面はさらなる混沌におちいることになる。

『ドキュマン』創刊の立役者となったのは、国立図書館の古銭・メダル展示室に所属するバブロン、デスペゼル、バタイユの他に、トロカデロ民族誌博物館のポール・リヴェ、ジョルジュ＝アンリ・リヴィエールであったと言われているが、彼らは『カイエ』で出会ったと言っても過言ではない。バタイユとバブロンとリヴェは上述した『カイエ』のプレ・コロンビア美術展特集号の寄稿者であり、デスペゼルは『カイエ』の編集長、リヴィエールは、特集のきっかけとなる展覧会を企画した張本人であった<sup>22</sup>。さらにいえば、『ドキュマン』の出資者である画商ジョルジュ・ヴィルデンスタインは、『カイエ』にも出資していた。家業である画商の仕事を助けるものとして出版事業に着目したヴィルデンスタインにとって、1929年は『ガゼット・デ・ボザール<sup>23</sup>』や『ボザール』を買い取って編集長におさまり、まさに美術誌界に

---

役職名であるが、当時は雑誌の編集部でも用いられていた。編集長 *directeur* を補佐する副編集長のような役職だったと考えられる。

<sup>20</sup> 『ドキュマン』の副題は「図版入り雑誌 *magazine illustré*」である。

<sup>21</sup> 1926年に創刊されたこの雑誌は6週間ごとに定期発行される論文雑誌で、毎回異なる統一テーマを掲げ、テーマに沿った論文を掲載していた。なお、本稿では以後この雑誌を『カイエ』と略記する。

<sup>22</sup> リヴィエールは、この展覧会に感銘を受けたリヴェによってトロカデロ民族誌博物館に引き抜かれる。そのため、『ドキュマン』編集委員時のリヴィエールの所属はトロカデロ民族誌博物館になっている。

<sup>23</sup> 1859年に創刊された『ガゼット・デ・ボザール』は、質の高い美術批評を載せる老

進出せんとする時期である。彼は自分の守備範囲が新興の民族誌学にまで広がるという考えで『ドキュマン』への出資に同意したのである<sup>24</sup>。

デスペゼルの手紙によれば、バタイユはデスペゼルと共にこの雑誌のプランを練り、『ドキュマン』というタイトルを提案し、ヴィルデンスタインのもとに赴きこの雑誌の企画説明を行っている<sup>25</sup>。さらに雑誌創刊後は編集作業に尽力しながら自身も記事を多数書くのだが、何を思ったのかバタイユは、『ドキュマン』ではそれ以前に『アレチューズ』で書いていた論文とは似ても似つかぬテキストを書くようになるのである。創刊前にデスペゼルたちと練り上げた編集方針からも、当時多くの読者を獲得していた『カイエ・ダール』のような美術誌になってほしいというヴィルデンスタインの願いからも逸脱し<sup>26</sup>、シュルレアリスム運動からの離反者たちを多数抱き込んだ『ドキュマン』を、バタイユは単なる美術考古学誌から特異な「既成概念に対する兵器<sup>27</sup>」に変えてしまった。こうした事態にデスペゼルは激怒したが<sup>28</sup>、それでもバタイユは態度を改めなかった。その代償として、バタイユは古銭・メダル展示室から印刷文書部局へ異動となり<sup>29</sup>、古文書学校出身の図書館司書としての出世コースからは外れてしまうが、ジョルジュ・バタイユという作家の認知度を高めるという意味では、この判断は正しかったといえるだろう。というのも『ドキュマン』をきっかけに、バタイユは作家として知られるようになるからである。

とはいえその後のバタイユの作家人生が、順風満帆に行ったかといえそうではない。1929年に発生した世界大恐慌のあおりを受け、1931年1月に『ドキュマン』が廃刊になるのである<sup>30</sup>。同じ年に『太陽肛門』という小冊子を出版しているという意味では、バタイユは作家としての歩みを着実に進めてはいるのだが、『ドキュマン』の廃刊は、バタイユにとってテキスト発表の場を失ったということに他ならない。新天地を求めてか、1930年代前半にバタ

---

舗雑誌であった。

<sup>24</sup> Michel Surya, *Georges Bataille La Mort à l'œuvre*, Gallimard, 1992, p. 147.

<sup>25</sup> Lettre de Pierre d'Espezel à Georges Bataille, 15 avril 1929, in *O.C.*, t. I, *op. cit.*, p. 648-649.

<sup>26</sup> Yves Chevretil-Desbiolles, *Les Revues d'art à Paris 1905-1940*, Ent'revues, 1993, p. 134.

<sup>27</sup> Michel Leiris, « De Bataille l'impossible à l'impossible *Documents* », *Critique*, *op. cit.*, p. 689.

<sup>28</sup> Lettre de Pierre d'Espezel à Georges Bataille, 15 avril 1929, in *O.C.*, t. I, *loc. cit.*

<sup>29</sup> ただしこの転属は、バタイユの度重なる遅刻や欠勤に一因があるとの指摘もある。

Michel Surya, *Georges Bataille La Mort à l'œuvre*, *op. cit.*, p. 182-183.

<sup>30</sup> Michel Leiris, « De Bataille l'impossible à l'impossible *Documents* », *Critique*, *op. cit.*, p. 692 ; Yves Chevretil-Desbiolles, *Les Revues d'art à Paris 1905-1940*, *op. cit.*, p. 146.

イユは3つの雑誌企画への参加を表明している。そのうちのひとつはジャック・プレヴェールとの友人でシュルレアリストであったマルセル・デュアメルらが1931年に立ち上げを画策していた雑誌、ひとつは当時バタイユが加入していた民主共産主義サークルを主宰するボリス・スヴァーリンによる左翼系の週刊誌、そして3つ目は1934年にバタイユの愛人となるコレット・ペニョ（ロール）の兄シャルルが編集長で、ピエール・ドリユ・ラ・ロシェルが文学主幹を務める予定だった雑誌である。最初の雑誌に関しては、バタイユの寄稿が一度は決まったものの、結局雑誌が創刊されず<sup>31</sup>、スヴァーリンの雑誌についてはバタイユがどのような形で関わろうとしていたのかは資料に乏しく判断できない<sup>32</sup>。第3の雑誌では、バタイユはドリユ・ラ・ロシェルの下で、アンドレ・マルローやアンドレ・ジッドとともに文芸欄を担当する予定だったそうだが<sup>33</sup>、この企画もお蔵入りとなった。結局バタイユは、1931年10月に加入した民主共産主義サークルの機関誌『社会批評』に記事を載せるようになる。短めの書評記事も書いているが、この雑誌で発表した代表的なテキストは、戦後の『呪われた部分』につながる「消費の概念」やファシズム論といった、文学や芸術とはあまり関係のないものとなった。1933年頃より意見の対立が顕在化してきたこの雑誌は、1934年2月にパリのコンコルド広場で起きた右翼の騒擾事件に対するメンバーたちの立場の違いなどが原因でサークルが解散してほどなく廃刊となる。バタイユは再びテキスト発表の場を失い、何も発表しない空白の期間が2年ほど生まれる。

最後に、実際に編集に携わったわけではないのだが、1930年代前半にバタイユが関わった雑誌として『ミノートル』に触れておきたい。1933年から39

---

<sup>31</sup> Lettres à Raymond Queneau, 15 septembre 1931 et 22 octobre 1931, in Georges Bataille *Choix de lettres 1917-1962*, Gallimard, 1997, p. 64, p. 68.

<sup>32</sup> 2004年にバタイユのフィクション作品を集めた『ジョルジュ・バタイユ 小説とレシ』がプレイヤー版で上梓された際に、詳細な年表を作成したマリナ・ガレットイは、この創刊計画に一切触れていない。また、シュルヤのバタイユ伝でも、巻末の年表でこうした計画があったと簡単に触れているだけで、その根拠となる資料は提示されていない。バタイユがクノーに宛てた手紙のなかに「こちら [=パリ] では、スヴァーリンの周囲で『カンディード』のような大がかりな左翼週刊誌を立ち上げる話が出ている」とあるので、この計画はたしかに存在したようなのだが (Lettre à Queneau, 22 octobre 1931, in Georges Bataille, *Choix de lettres 1917-1962*, *ibid.*, p. 67)、バタイユがこの雑誌に協力する意志があったと判断できる資料は見当たらず、シュルヤがそう考える根拠は不明である。

<sup>33</sup> Michel Surya, *Georges Bataille La Mort à l'œuvre*, *op. cit.*, p. 633-634. マリナ・ガレットイは、この雑誌企画を1930年代前半のものとし、それ以上の年代の特定を避けている。Marina Galletti, «Chronologie», *Georges Bataille Romans et Récits*, coll. «Bibliothèque de la Pléiade» Gallimard, 2004, p. CIV.

年にかけて 13 号が発行されたこの雑誌は、出版業を始めたばかりのアルベール・スキラと美術批評家のエミール・テリアードがタッグを組んで作ったモダン・アートの雑誌である。ブルトンやエリュアールなどシュルレアリストたちが編集委員に加わったことで、『ミノトール』は次第にシュルレアリスムの色彩が濃くなり、最終的には『革命に奉仕するシュルレアリスム』に続く第3のシュルレアリスム機関誌と言われるようにまでなった<sup>34</sup>。『ドキュマン』以降、シュルレアリストたちと対立関係にあったことを考えるとおかしな話だが、バタイユは当初この雑誌に参加する予定であった。『シュルレアリスム革命』と『ドキュマン』の挑発的な態度をこの新しい雑誌に取り込みたいと考えたスキラとテリアードは、両者の対立をさほど深刻なものとして捉えていなかったのだろう。こともあろうに両陣営にこの雑誌への協力を呼びかけのた。バタイユの名が挙がっていると知ったシュルレアリスム陣営が協力に難色を示すと、スキラたちはバタイユを切り捨てることを選んだため<sup>35</sup>、バタイユのこの雑誌への参加は『ミノトール』というタイトルの提案だけで終わってしまう<sup>36</sup>。

のちにバタイユは、この一件を「私の雑誌はシュルレアリスムになった<sup>37</sup>」と表現したそうだが、その言葉には、『ミノトール』はそもそも自分に託された雑誌だったという自負が見て取れる。『ミノトール』の編集作業においてブルトンの意向は絶対で、彼が首をたてにふらない限り、いかなる記事もこの雑誌に掲載できなかったそうである<sup>38</sup>。そのせいかバタイユがこの雑誌に寄稿したのは、創刊から3年が過ぎた1936年に発行された8号となった。

編集に一切関わっていないこの雑誌の編集方針にバタイユの影響が及ぶはずはないのだが、それにもかかわらず、『ドキュマン』で予告がなされていたダカール＝ジブチのアフリカ横断調査団の結果報告特集が『ミノトール』初年度第2号で組まれるなど、『ミノトール』には『ドキュマン』との連続

---

<sup>34</sup> 巖谷國士「ミノトールの思い出」『『ミノトール』復刻版・別冊』、みすず書房、1986年、4-5頁。

<sup>35</sup> Michel Surya, *Georges Bataille La Mort à l'œuvre*, op. cit., p. 234.

<sup>36</sup> テリアードとマソンは『ミノトール』というタイトルは、バタイユとマソンが考えたと言っている。Jeanine Warnod, « Visite à Tériade en hiver 1982 », *Regards sur Minotaure*, Musée d'art et d'histoire, Genève, 1987, p. 245 ; « Interview d'André Masson, le 27 octobre 1983 », *ibid.*, p. 246. ただしアルベール・スキラは、この雑誌の名付け親はロジェ・ヴィトラックだと述べている（アルベール・スキラ「ミノトールの発行者として」『『ミノトール』復刻版・別冊』、前掲書、13頁）。

<sup>37</sup> Michel Surya, *Georges Bataille La Mort à l'œuvre*, op. cit., p. 234.

<sup>38</sup> アルベール・スキラ「ミノトールの発行者として」『『ミノトール』復刻版・別冊』、前掲書、15頁。

性がある<sup>39</sup>。そしてその類似性はこれまで多くの研究者によって指摘されてきた。一例を挙げれば、シュヴルフィス=デビオルは『ミノトール』の折衷主義的などころに『ドキュマン』の影響を見て取っているし<sup>40</sup>、シュルヤは『ドキュマン』ないしバタイユを彷彿とさせる要素——その挑発的な側面、ニーチェ的な側面、ギリシャ神話への嗜好、そして『ミノトール』というタイトル——が影のようにこの雑誌につきまとっていると述べている<sup>41</sup>。

### 1930年代後半から第2次世界大戦前夜まで

1930年代前半のバタイユにとって、雑誌は文筆活動を続けるうえでの生命線といってよかったが、1930年代後半になってもその状況は変わらない。というのも書籍刊行がなかなか軌道に乗らなかったからである。バタイユは1936年にマソンと共に『供儀』という作品を出す、この時期に発表されたバタイユの著作はこれだけである。しかも、この唯一の作品とて簡単に刊行にいたったわけではなく、告知が出てから実際に本が発行されるまでに2年の月日が流れている<sup>42</sup>。そんななか、雑誌や論集に掲載された論文の数は、『ドキュマン』や『社会批評』が発行を続けていた時期に比べるとかなり減少しており、雑誌への寄稿も友人を頼ってなされていたようである。2年の沈黙を破って発表された「迷宮<sup>43</sup>」が掲載された『哲学研究』の編集部には、『ドキュマン』に寄稿していたアンリ=シャルル・ピュエッシュと友人ジャン・ヴァールがおり、『ギリシャ旅行』には『ドキュマン』とブルトン糾弾パンフレット『死骸』で行動を共にしたロジェ・ヴィトラックが、また当時、世界でもっとも美しい雑誌と言われた文芸美術誌『ヴェルヴ』にはテリアードの姿があった。その他にバタイユは文芸誌『ムジュール』や『NRF』にも寄稿しているが、両誌は当時、バタイユが主宰した社会学研究会に参加していたジャン・ポーランが指揮をとっていた<sup>44</sup>。

<sup>39</sup> 『ドキュマン』と民族誌学の関係については以下の著作が詳しい。ジェイムズ・クリフォード「民族的シュルレアリスムについて」『文化の窮状』清水展他訳、人文書院、2003年、151-193頁。

<sup>40</sup> Yves Chevretil-Desbiolles, *Les Revues d'art à Paris 1905-1940*, op. cit., p. 132.

<sup>41</sup> Michel Surya, *Georges Bataille La Mort à l'œuvre*, op.cit., p. 235-239.

<sup>42</sup> Lettres d'André Masson à Georges Bataille, 5 septembre 1934, 17 janvier 1936, in André Masson, *Les Années surréalistes : correspondance 1916-1942*, La Manufacture, 1990, p. 212-213, p. 306-307.

<sup>43</sup> Georges Bataille, « Le Labyrinthe », *Recherches philosophiques*, t. V, 1935-1936, in *O.C.*, t. I, op. cit., p. 433-441.

<sup>44</sup> 『ムジュール』の編集長はヘンリー・チャーチというアメリカ人の富豪だったが、彼は金銭面でこの雑誌を支えているだけで、実際の編集はポーランに一任していた

ただ、この時期のバタイユがそれ以前と異なるのは、雑誌に寄稿するだけでなく、自分で雑誌を立ち上げることに成功した点である。いずれも規模の小さな雑誌ではあったが、この意味は大きい。1930年代後半にかけて、バタイユはグループでの活動を積極的に行っているが、バタイユが主宰する雑誌は、同じ時期にバタイユが切り盛りしていたグループと関連がある点で共通する。『カイエ・ド・コントロール=アタック<sup>45</sup>』（1936年）と『アセファル』（1936年-39年）は、ともにバタイユが運営の中心的役割を担ったグループから生まれた雑誌だった。

まず『コントロール=アタック』から見ていこう。この雑誌は、反ファシズム、反国家主義、反資本主義を標榜する「革命的知識人の共闘同盟」の機関誌として準備された。このグループの主要メンバーは、シュルレアリスム運動および民主共産主義サークルに属していた作家たちである。「シュルレアリスム第2宣言」以降、反目しあっていたブルトンとの和解を1935年9月に成立させるとすぐに、バタイユはコントロール=アタックの活動を始動させる。1935年10月にはマニフェストが発表され、同年11月に出版されたブルトンの『シュルレアリスムの政治的立場』には、機関誌『コントロール=アタック』の告知が折り込まれた<sup>46</sup>。その告知によれば、この機関誌はひとつの号で複数の執筆陣が複数のテーマに関する文章を書くタイプの雑誌ではなく、1冊につきひとりないしふたりの執筆者が、ひとつのテーマを論じる分冊形式の定期刊行物だった。論争と時事を扱う別冊を除いて14冊の冊子が発行される予定であったこと、そして創刊号が1936年1月に出版予定であったことが分かっている。しかし結成当初から二極化の傾向があったメンバー間の不和は、何か行動を起こすたびに深刻化していく。そして1936年3月末にブルトンらシュルレアリスムグループのメンバーたちがグループを離れた直後の4月2日には、今度はバタイユが事務局長を辞任するという事態に陥り、コントロール=アタックは4月末に空中分裂してしまう。『コントロール=アタック』が発行されたのは1936年5月であるから、この雑誌はグループが消滅したあとに出版されたことになる。機関なき機関誌となったこの冊子が発行されると、ブルトンらシュルレアリスムグループは、これが正統なシュルレアリスム運動とは無関係であるという声明を発表し、コントロール=アタックでの活動をシュルレ

---

と言われている。

<sup>45</sup> 以後、『カイエ・ド・コントロール=アタック』は『コントロール=アタック』と略記する。

<sup>46</sup> Georges Bataille, « Les Cahiers de « Contre-Attaque » », *O.C.*, t. I, *op. cit.*, p. 384-392.

アリズムの歴史から葬り去ってしまう<sup>47</sup>。結局、続きはないというこの声明の言葉通り、『コントロール=アタック』は、バタイユが書いた3本のテキストを収録した1号を出しただけで途絶えている。

『コントロール=アタック』がコントロール=アタックでの活動と連動していたのに対して、『アセファル』と秘密結社アセファルの関係は複雑である。雑誌とグループはまったく同じ名前を冠しているのだが、『アセファル』の掲載テキストは、秘密結社がひそやかに持っていた会合の内容と直接的な関連がないという意味で、アセファルの機関誌ではない。ならば別個の試みなのかといえばそうでもなく、雑誌とグループはなんと不思議な距離を保つのである。

雑誌と秘密結社という、ふたつのアセファルの活動の軌跡を辿っていこう。コントロール=アタックの事務局長を辞任した直後に書かれたメモによれば、バタイユは1936年4月4日、つまりコントロール=アタックを実質的に脱退してから2日後には新たな共同体の創設を考え始めている<sup>48</sup>。その後バタイユは、6月4日に友人たちを集めて秘密結社の前会合とでもいうべき集まりを催す。のちにバタイユは、この会合が「精神的共同体を設立しようという決断の最初の帰結<sup>49</sup>」であったと振り返っているが、実際にはその時は秘密結社ではなく研究会を立ち上げるための話し合いが行われたようである。アセファルが宗教的な儀式を持つ秘密結社という形態になったのは1936年11月以降であった。活動最盛期には、月例会を開くほど活動も活発化したが、その2年後にあたる1938年10月をもってアセファルは解散している。

一方の雑誌の計画は秘密結社創設計画が具体化するより前から始動し、秘密結社が解散してからも発行を続けている。バタイユが『アセファル』創刊号に掲載する2本のテキストを執筆し、マゾンにこの雑誌のためのイラストの作成を依頼したのは1936年4月、そしてこの雑誌の創刊は、アセファルでの活動が軌道に乗る以前の同年6月24日である。しかも秘密結社のありようがまだ定まっていない6月9日の時点で、雑誌の方はほぼ完成していた。バタイユはアセファルのメンバーになるジャック・シャヴィに次のような手紙を書き送っている。

---

<sup>47</sup> «Notes», *O.C.*, t. I, *ibid.*, p. 672; 吉田裕『異質学の試み バタイユ・マテリアリスト I』、書肆山田、2001年、144-145頁。

<sup>48</sup> Georges Bataille, «Programme», *O.C.*, t. II, 2002, p. 273.

<sup>49</sup> Georges Bataille, «Constitution du «journal intérieur» (2 février 1937)», *L'Apprenti sorcier*, Éditions de la Différence, 1999, p. 340.

製版に出すタイトルを送ります。他の活字にしようとして無駄骨を折ったため、とても遅れてしまいました。それぞれの文字の間を均等に4ミリに縮めなければなりません。[…] 現段階でまだできていないのはタイトルだけで、それはぼくのせいです…<sup>50</sup>。

1936年6月に創刊号を出したあと、バタイユたちは1937年1月に2号特大号（「ニーチェとファシストたち」特集）、同年7月に3-4号合併号（「ディオニソス」特集）を刊行している。秘密結社に属していながら『アセファル』に寄稿しないメンバーがいる一方で、秘密結社のメンバーではないジャン・ヴァールやロジェ・カイヨワ、ジュール・モヌローらが『アセファル』に寄稿しており、この雑誌を秘密結社の機関誌と捉えるのは難しい。

また、秘密結社解散後の1939年1月に『アセファル』最終号が刊行されたことも、両者が希薄な関係にあると考える根拠となるだろう。『アセファル』3-4号では、次号はエロティシズム特集であるとの告知がなされ、その2か月後にはアセファルのメンバーたちに対してエロティシズムをテーマにした集合出版物を刊行するという手紙が送られているので、この号を出版する心づもりは実際にあったのだろう。しかしこの計画は結局実現されないまま、秘密結社は翌年解散してしまう。雑誌もそのまま廃刊かと思いきや、解散から1年以上が過ぎた1939年に、『アセファル』は最終号（「狂気、戦争、死」特集）を刊行するのだ。とはいえこの冊子はタイトルこそ『アセファル』であるが、寄稿者はバタイユだけ、版元もフォーマットもそれまでとはまったく異なる形で編まれている。既刊号との連続性に乏しいこの冊子を、バタイユはなぜか『アセファル』の一部として出版したのである。

秘密結社というだけあって、会員には守秘義務があり、アセファルの詳細は今なお不明だが、証言がまったくないわけではない。パトリック・ヴァルドベルグによれば、アセファルのメンバーは新月の夜にパリ郊外のマルリの森にある落雷を受けた柏の木の下で集会を開いており、新規加入者がある場合は、『アセファル』の表紙の無頭人が左手に持っているナイフのような短剣で新規加入者の腕を切る「血のイニシエーション」を行っていたという<sup>51</sup>。『アセファル』の誌面はこうした秘密結社での活動とは別の次元にあるのは明らかだが、それでは秘密結社と雑誌は無関係かというところでもない。む

---

<sup>50</sup> Lettre de Georges Bataille à Jacques Chavy, 9 juin 1936, in Georges Bataille, *L'Apprenti sorcier*, *ibid.*, p. 301.

<sup>51</sup> Patrick Waldberg, « Acéphalogramme », *Magazine littéraire*, n° 331, 1995, in Georges Bataille, *L'Apprenti sorcier*, *ibid.*, p. 594-595.

しろ両者の結びつきは堅固で、1937年の「アセファル年度末総括」でバタイユは、雑誌が秘密結社のメンバーたちの結束を強める絆になると考えている。

それ以上に、私たちはこれらの出版 [『アセファル』2号と3-4号の出版] をきわめて厳しい財政状況のもとで、つまりまったくもって頼りない財源をもってなしとげたという事実を強調したい。ただ真の信念だけが、実現するとは思えなかった試みであったこれらの刊行を可能にしたのだ。私たちは行動という惨めな逃げ口上に訴えたりはしなかったし、文学的な虚栄心が私たちに働くこともなかった。私たちが利用した外部からの援助はわずかなものであり、私たちはたった7人である。このことが私たちを突き動かす信念の尺度であり続けんことを願う<sup>52</sup>。

『ドキュマン』にシュルレアリスム運動離反者たちを呼び込む求心力となった文学と、コントロール=アタックでの活動の目的であった政治を否定し、ただ雑誌の発行のみをアセファルの求心力として掲げている点が、きわめて興味深い。1935年1月に、バタイユはレリスに雑誌の計画があることを告げている。「文学表現が居場所を見つけるとしたら、それは文学表現がしかじかの探求とおのずと結びつくときだけ<sup>53</sup>」になるというその雑誌が、具体的にどの雑誌だったのか確認はないが、文学を排した雑誌を作ろうとしたバタイユの思いは、もしかすると時を経て『アセファル』で果たされたのかもしれない。

最後にバタイユが社会学研究会の機関誌として立ち上げようとしていた『ルリジオ』を見てみよう。社会学研究会の発表録や関連文献は、ドゥニ・オリエが編んだ『聖社会学<sup>54</sup>』によって参照可能となったが、同研究会の雑誌の詳細はあまり分かっていない。社会学研究会は1937年に創設されて以来、創設の辞は『アセファル』で、研究会での講演論文は『NRF』で発表し、自身の雑誌は持たなかった。しかし1939年10月1日に社会学研究会の雑誌を発行する計画があったことが、バタイユがカイヨワに宛てた手紙から分かっている<sup>55</sup>。この手紙によれば、タイトルの候補は『ルリジオ』の他に、『ウラノス』、『ネミ』、『ディアヌス』もあった。しかし1939年6月6日の会

---

<sup>52</sup> Georges Bataille, « Conclusion annuelle », *L'Apprenti sorcier*, *ibid.*, p. 401-402.

<sup>53</sup> Lettre à Michel Leiris, 20 janvier 1935, in Georges Bataille, *Choix de lettres 1917-1962*, *op. cit.*, p. 103.

<sup>54</sup> Denis Hollier, *Le Collège de sociologie*, coll. « folio essais », Gallimard, 1995.

<sup>55</sup> Lettre à Roger Caillois, 20 juillet 1939, in Georges Bataille, *Choix de lettres 1917-1962*, *op. cit.*, p. 170-171.

合後、活動が失速していく中での雑誌作りはうまくいかなかったようで、結局この雑誌は創刊されずに終わっている。1939年7月20日付の手紙で、バタイユはカイヨワにこの雑誌のための書評原稿を早く送ってくれるよう、かなり強い口調で頼んでいるが、11月13日付の手紙では、雑誌に掲載されるはずだった原稿は約束通りポーランに渡したと素っ気なく報告している<sup>56</sup>。1939年9月に勃発した第2次世界大戦の影響もあり、バタイユはこの雑誌の創刊計画と、社会学研究会の活動自体を比較的早くに断念したようである。

## 第2次世界大戦勃発から戦後にかけて

第2次世界大戦中のバタイユは、それ以前と比べると実に多くの本を出版している。1941年にピエール・アンジェリックという筆名を使って『マダム・エドワルド』を出したのを皮切りに、43年に『内的体験』、『息子』（ルイ・トラント名義）、44年には詩人ジャン・レスキュールの雑誌『メサージュ<sup>57</sup>』の友の会会員向けコレクション第1号として、詩集『大天使のように』を刊行した他に、『有罪者』も発表している。それまでの10年に出された3冊の本が、どれも150部程度しか発行されない規模の小さな作品だったことを考えると、大手出版社のN.R.F（現ガリマール出版社）から『内的体験』と『有罪者』が出版された意味はとりわけ大きい。ナチスの迫害を恐れて第2次大戦中に渡米した画家アンドレ・マソンに終戦直後に送った手紙で、バタイユは「『太陽〔肛門〕』以降、本を出していなかったこのぼくが、戦時中はまんまと4冊も本を出したんだ。そのうちの2冊はN.R.Fから、もう2冊は地下出版社から（こちらは『目玉』系）<sup>58</sup>と、素直にその喜びを綴っている。これ以降、バタイユは作家としての活躍の場を広げていくことになる。

その反面、この時期のバタイユの雑誌論文は大幅に減少する。1941年にバタイユは、ヴィシー政府の息がかかった「若きフランス<sup>59</sup>」という芸術振興

---

<sup>56</sup> *Lettre à Roger Caillois, 13 novembre 1939, ibid., p. 174.* カイヨワの原稿はポーランが主宰する『ムジュール』に掲載される。

<sup>57</sup> この雑誌は対独協力作家ドリュ・ラ・ロシェルが率いる『NRF』およびナチスに対抗するべく作られた。そうした姿勢が当局からマークされたのか、戦中の『メサージュ』は3号以降、タイトルと発行場所を次々と変え、検閲の目をすり抜けながら刊行されていく（3号『清純の修練』、4号『沈黙の修練』、5号『フランス領』、6号『詩の源泉』）。Olivier Cariguel, *Panorama des revues littéraires sous l'Occupation juillet 1940 - août 1944*, IMEC, 2007, p. 264-269.

<sup>58</sup> *Lettre à André Masson, 22 septembre 1944, in Georges Bataille, Choix de lettres 1917-1962, op. cit., p. 216.*

<sup>59</sup> もともとは音楽振興団体だった同名の団体からその名を借りて発足した「若きフランス」は、ヴィシー政府が提唱したフランス国民革命（「自由・平等・博愛」に代

団体が準備していた雑誌に協力する意志を示してレリスの逆鱗に触れるが<sup>60</sup>、結局この雑誌は創刊されない。さらに1943年6月には、ドリュ・ラ・ロシェルの編集長辞任後の『NRF<sup>61</sup>』への寄稿をポーランに依頼され、バタイユは原稿を送るが、『メサージュ』が『NRF』に協力した作家のテキストは掲載しないと通達してきたことを理由に、原稿の引き上げを依頼している<sup>62</sup>。結局、第2次大戦中のバタイユはポーランの『ムジュール』に1回、『メサージュ』に2回記事を出しただけで、雑誌を創刊する計画も立てた形跡がない。

バタイユが雑誌に再び接近するのは、第2次世界大戦の終わりが見えてきた1944年6月である。レリスへの手紙には、戦後の新しい世界にかける意気込みとともに雑誌のことが綴られている。

この間、雑誌について（正確には雑誌以上のものだが）提起したあれこれの問題がずっと気になっている。サルトルとカミュにまた話ができるよう、いまはいろいろやってみることにする。戦後にかける勝負は、本当に重要なものになるだろうから<sup>63</sup>。

---

わり「労働・家族・祖国」を標榜する政治思想）に則ったフランス文化の再生と若い芸術家たちの援助を目的として1940年に設立され、1942年に解散した団体である。1940年頃バタイユと知り合い、以後深い友情で結ばれるモーリス・ブランショは、「若きフランス」のパリ事務所にて文学担当として勤務していた。「若きフランス」については、以下の文献を参考にした。クリストフ・ビダン「ヴィシーを利用してヴィシーに反逆すること」『モーリス・ブランショ 不可視のパートナー』安原伸一郎訳、水声社、2014年、146-152頁。

<sup>60</sup> Michel Leiris, *Journal 1922-1989, op. cit.*, p. 336-338.

<sup>61</sup> 『NRF』の歴史についても簡単に触れておきたい。1908年にジッドの周辺にいた作家たちによって作られたこの文芸誌は、第2次世界大戦勃発したともない1940年6月に休刊する。しかし「占領後もフランスの知識人は自由に自分の考えを表現し続けているという幻想を世界に発信すべく（『レットル・フランセーズ』、1943年7月第8号）」この雑誌はドイツ軍により休刊から半年後の同年12月に復刊される。復刊後はジャン・ポーランに代わり、対独協力作家ドリュが編集長に就任するが、多くの作家たちが協力を拒んだため、ドリュは思うような誌面作りが出来なかった。結局、ドリュは1943年6月に編集長の座から退き、『NRF』は再び発行を停止する。対独協力雑誌の嫌疑をかけられ、終戦後しばらく発行が許されなかったこの雑誌が、タイトルを『新NRF』に改めて再出発を果たすのは1952年だが、ドリュ退陣直前に「非政治的な」新編集長のもとで発行継続が画策された時期があったらしい。バタイユが寄稿を依頼されたのは、この時の『NRF』である。 *En toutes lettres... Cent ans après la NRF*, Gallimard, 2009, p. 57-73.

<sup>62</sup> Lettres à Raymond Queneau, 21 juin 1943 et 5 juillet 1943 ; Lettres à Michel Leiris, juin 1943 et 14 juillet ; Lettre à Jean Paulhan, juillet 1943, in Georges Bataille, *Choix de lettres 1917-1962, op. cit.*, p. 191, p. 194-195, p. 196, p. 197, p. 198.

<sup>63</sup> Lettre à Michel Leiris, juin 1944, in Georges Bataille, *Choix de lettres 1917-1962, ibid.*, p. 211.

結局、この話も具体化しなかったようだ。しかし第2次世界大戦後、バタイユはたしかに勝負に出たかのように精力的に動き出す。脳動脈硬化症の症状が深刻化する1953年までのバタイユは、コンスタントに著作を発表するかたわら、編集長として『クリティック』を切り盛りし、多くの雑誌論文を——バタイユのガリマール全集の最後の2巻に収録されているのは、すべて戦後発表された雑誌論文である——書いた。発表の場はおもに『クリティック』だったとはいえ、バタイユが寄稿した雑誌は30誌近くにもおよぶ。寄稿誌の大半はフランスの文芸誌だが、全体のおよそ4分の1は外国の雑誌であるのは、フランスの文壇にもグローバル化の波が押し寄せつつあった証拠であろうか、とりわけ興味深い。バタイユがフランス国外の雑誌に投稿した内訳は、スイス（アルベール・スキラが編集長を務める文芸誌『ラビラント』と絵画からファッションまで広い意味での「アート」をテーマにした美術誌『フォルム・エ・クルール [形態と色彩]』）、ベルギー（文芸誌『サンテーズ』と美術誌『レ・ボザール』）、イタリア（バタイユも会員になっていたヨーロッパ文化協会が発行する政治文芸誌『コンブランドル』と、マルグリット・カエターニがイタリアで立ち上げた多言語文芸誌『ボッテゲ・オスクーレ』）、イギリス（『タイムズ』が発行する文芸週刊誌『タイムズ文芸付録 (T.L.S.)』）、アメリカ（アメリカ人作家ドワイト・マクドナルドが主宰する政治誌『ポリティックス<sup>64</sup>』）、チェコ（ポーランド文壇の重鎮ヤロスロワ・イヴァシュキェヴィッチが編集長を務める文芸誌『作品<sup>65</sup>』）である。また、1920年代にマリア・マクドナルドとユージェヌ・ジョラス夫妻が立ち上げた英語の前衛文芸誌『トランジッション』の後継誌にあたる『トランジッション 48』に、一般的に不仲と言われているサルトルと共に編集委員として関わっていたことも注目に値する。

1970年代から順次刊行されたガリマールのバタイユ全集には、フランス国内の雑誌に発表されたバタイユのテキストがほぼ収録されている反面、フランス国外の雑誌で発表された文章については多くが抜け落ちている。そうし

---

<sup>64</sup> Marina Galletti, « Chronologie », *Georges Bataille Romans et Récits, op. cit.*, p. CXXIII.

<sup>65</sup> チェスワフ・ミウオシュ『ポーランド文学史』西成彦訳、未知谷、2006年、645頁。1956年秋にチューリヒで開催された国際雑誌会議に際してか、この雑誌の書記と知り合ったバタイユは、『作品』の「フランス文学の現在」特集号に寄稿しただけでなく、レリスに連絡を取って原稿依頼を行うなど、この雑誌に積極的に協力した。Lettre à Michel Leiris, 22 janvier 1957, in Georges Bataille, Michel Leiris, *Georges Bataille Michel Leiris Échanges et correspondances, op. cit.*, p. 184.

た埋もれていたテキストを探し当て、プレイヤー版のバタイユの年表に載せたマリナ・ガレットティの功績は大きいと言えるだろう。

また、戦後のバタイユは『クリティック』以外にも『アクチュアリテ』と『ジュネーズ』というふたつの雑誌の刊行を試みている。『アクチュアリテ』は、1946年にカルマン=レヴィ社から刊行されたバタイユが監修した叢書のシリーズ名なのだが<sup>66</sup>、この叢書は企画段階では雑誌だったと言われている<sup>67</sup>。当初の企画の名残であろうか、叢書とはいえ、複数の作家が書いたテキストを編んだ論集というそのスタイルゆえに、『アクチュアリテ』の形式は、雑誌にきわめて近い作りとなった。またそれは、監修者であるバタイユの感覚にも合致している。1946年10月にドイツの出版社がこの叢書の著作権に関心を示した際、バタイユはこの本に収録された論文は、雑誌掲載論文と同じ条件で出版されたという理解を示している<sup>68</sup>。1945年2月に締結された契約書によれば、『アクチュアリテ』は少なくとも3号までは刊行することが契約の条件に盛り込まれており、各巻のタイトルもすでに決定済みであった。バタイユは第1号が出るより前から2号の原稿を集めていたが、結局刊行できたのは第1巻の『自由スペイン』1号のみで、1948年に完成を目前に第2号『文学と政治』の発行を断念している。

最後に『ジュネーズ』を見てみよう。『ジュネーズ』は、かつてシェーン社を切り盛りしていたモーリス・ジロディアスとの会話から生まれた<sup>69</sup>。『クリティック』が他社の手に渡ったあとも、バタイユとこの出版人との関係は途切れなかったようで、1953年にジロディアスがフランス官能小説の英訳本を手掛けるオランピア・プレスを興すと、バタイユはサドの『ソドムの120日』の英訳版へ序文を書き（1954年）、『眼球譚』（1953年）や『マダム・エドワルダ』（1956年）の英訳版をこの出版社から出している。

『ジュネーズ』の創刊話が浮上する1957年は、バタイユが『エロティズム』をミニユイ社から上梓した年であり、また1953年以降、投稿回数が激減

---

<sup>66</sup> カルマン=レヴィ社は、1947年6月から1949年9月まで『クリティック』の版元でもあった。シェーン社で創刊された『クリティック』は、同社の業績悪化によりカルマン=レヴィ社に譲渡されたのち、1年にわたる休刊期間を経て1950年10月にミニユイ社から刊行されることになる。

<sup>67</sup> Michel Surya, *Georges Bataille La Mort à l'œuvre*, op. cit., p. 445.

<sup>68</sup> Lettre à Pierre Calmann, 2 septembre 1946, in Georges Bataille, *Choix de lettres 1917-1962*, op. cit., p. 333.

<sup>69</sup> Jean-Pierre Le Boulter, Dominique Rabourdin, « La signification de l'érotisme - Un inédit de Georges Bataille présenté avec le dossier de la revue *Genèse* », *Revue de la Bibliothèque nationale*, n° 17, 1985, p. 28.

していた『クリティック』への寄稿がついに途絶えた年でもあった。そのようなタイミングで舞い込んできた「性科学、精神分析、性哲学」という副題を持った学際的な新しいグラビア誌の話に、バタイユは飛びついたのかもしれない。バタイユは監修で、編集長には秘密結社アセファルについて証言を残したヴァルドベルグがおさまるはずだった。バタイユはこの雑誌のために「エロティシズムの意味」というテキストを執筆しながら、ヴァルドベルグとともに寄稿者の選定をしたり、寄稿候補者に原稿依頼をかけたりにして着々と創刊準備を進めていたが、ジロディアスの緩慢な動きにより企画は停滞してしまう。結局、バタイユとヴァルドベルグが準備した雑誌の構成を見たジロディアスの、教養ある読者は予想読者の1割しか見込めないのだから、ひとめを引く露骨なグラビアを増やそうという提案を、ヴァルドベルグとバタイユが拒絶した頃から雲行きが怪しくなり、1958年暮れに『ジュネーズ』計画の中止が決定する<sup>70</sup>。それはまた、ジロディアスとの関係の終わりでもあった。

『ジュネーズ』は結局刊行されなかったが、バタイユと雑誌の関わりを考える上では、この雑誌の結果よりも始まりに注目したい。1957年のバタイユは、筆一本で食べていけるほどではなかったのかもしれないが、作家としての地位をすでにある程度確立していた。作品を複数持ち、信頼される雑誌の責任者となり、また彼に寄稿を依頼する他の雑誌もあった。『クリティック』研究者であるパトロンは、バタイユが同誌を創刊した背景には、自分を酷評したサルトルから身を守るための場所を欲しがっていたという事情が働いていたことを示唆している<sup>71</sup>。たしかにそういう側面もあったかもしれない。当時、サルトルは『存在と無』という空前のヒット作を世に出し、『レ・タン・モデルヌ』という自分の雑誌を持った勢いのある作家であった。一方のバタイユは、『内的体験』をようやく刊行したところで、両者の文壇における立場には明らかな違いがあっただろう。とはいえ『クリティック』という「自分の場所」を見つけてからも、こうして新しい雑誌の試みに乗り出そうとしているところを見ると、バタイユが身を守る場所欲しさで雑誌を立ち上げているわけではないことが分かる。

---

<sup>70</sup> Jean-Pierre Le Boulter, Dominique Rabourdin, « La signification de l'érotisme -- Un inédit de Georges Bataille présenté avec le dossier de la revue *Genèse* », *Revue de la Bibliothèque nationale*, *ibid.*, p. 30.

<sup>71</sup> Sylvie Patron, *Critique 1946-1996*, *op. cit.*, p. 5.

## まとめ

本稿冒頭で、バタイユがさも簡単にできることのように雑誌創刊を考えていると指摘したが、実際に雑誌を立ち上げ、それを運営していくのはたやすいことではない。『クリティック』の初代副編集長だったピエール・プレヴォ宛の膨大な手紙を読むと、バタイユがいかにこの雑誌に心血を注いでいたかが分かる。少々長いが、その一部を見てみよう。

手紙がこんなに遅れて本当に申し訳ない。

ディアース [バタイユの妻] が流感にかかり、とても疲れていたのです。同封テキスト —— 自分のものは含めないで3本の原稿を仕上げました —— は、思っていたよりずっと厄介で、時間を取られてしまいました。

アラン・ジラルの原稿を創刊号に載せるべきか確信は持てませんが、じゅうぶん出版に値すると私は思っています。したがってパイロット版のために印刷所に渡してもいいのではないのでしょうか。

活字の大きさに関して指示を出しました。私たちの合意に見合うもので、記号とスペース込みで1ページ最小3000字、最大2800字です。ランニングタイトルも必要でしょう。

フォントはイギリスタイプのエルゼヴィル体（いずれにせよチェルテンハムタイプ）がいいでしょう（イギリスの雑誌の体裁は、フランスのそれよりよほど優れています）。けれどもかなり細字のデイド体でもいいです。

印刷所には、私たちが選んだ活字はかなり多いことに注意するよう伝えてくれますか。私たちが創ろうとしている雑誌は、信頼に値する体裁を取っていかなくてはならず、ñが入るスペイン語の単語や、ギリシャ語の単語を印刷する必要があります。またカッコ記号も自由に使えないといけないし、当然のことながらボールド体も不可欠です。

表紙は、かなりシンプルにする必要があります。どうするにせよ、白地に2色刷りであるべきでしょう。タイトルは赤や緑、青といった人目を引く鮮やかな色にして、その他の活字は黒にします [...] <sup>72</sup>。

この手紙の中で印象に残るのは、バタイユの指示の細やかさである。その行き届いた配慮は、事務手続きが不得手で一度も選挙に行かなかったという逸話を持つ人物のものとはとても思えない<sup>73</sup>。パトロンは、『クリティック』はバタイユが費やした時間と労力において「バタイユの雑誌」であったと述べている。

---

<sup>72</sup> Lettre à Pierre Prévost, 15 mars 1946, in Georges Bataille, *Choix de lettres 1917-1962*, *op. cit.*, p. 272-273.

<sup>73</sup> Michel Surya, *Georges Bataille La Mort à l'œuvre*, *op. cit.*, p. 461.

〔『エスプリ』の〕ムーニエのような、何らかの運動の創始者でもなく、〔『レ・タン・モデルヌ』の〕サルトルのような、何らかのモラルや思想の代表でもない編集長。〔…〕立ち上げや立て直しの過程で、『クリティック』が厳密な意味で「ジョルジュ・バタイユの雑誌」なのは、何においてなのだろうか。

『クリティック』は、何よりもバタイユが費やした時間と労力において「バタイユの雑誌」である。〔…〕バタイユは5年の間に100本近い記事と短評を、実名ないしはさまざまなペンネームで書いた。しかもこれは、他の寄稿者の記事の書き直しを含めない数である。他の寄稿者の記事の書き直しは、〔…〕ときに自分の執筆よりも優先して行われた<sup>74</sup>。

約束されていた報酬がなかなか支払われなかったにもかかわらず、バタイユは身銭を切って『クリティック』の打ち合わせのためパリに出向き（当時のバタイユはパリへのアクセスがさほど容易ではないヴェズレーで暮らしていた）、多くの時間を割いて編集業務——出版社に対する献本依頼の文書の作成、広告依頼、タイトルロゴのデザイン、フォントや色の指定、原稿依頼、査読、寄稿者への査読結果の通告、自他問わず原稿の推敲、グラチェックや書評する書籍を寄稿者たちに送る配送手配の指示など——を行った。

バタイユをそこまで雑誌に向かわせたものは何だったのだろうか。ガリマールのバタイユ全集で戦後のバタイユの寄稿論文を集めた巻の編者を務めたフランシス・マルマンドは、資金と時勢と発注の有無といった不確かな要素にその命運が大きく左右されるので、賢明な作家は雑誌にあまり関わろうとしないが、バタイユはそうではなかったとし、この作家の雑誌に対するひとかたならぬ愛着を指摘した<sup>75</sup>。たしかに書物を編むことに対する愛がなければできないと思えるほどに、バタイユは雑誌に時間と労力を費やしている。

また雑誌が、バタイユのテキストの特徴や嗜好に合致する書物だったということも、バタイユが雑誌と終生関わり続けたことに大きく影響しているだろう。1920年代から30年代初頭にかけては、当時活発に活動していたシュルレアリスム運動が好んで論じた芸術の、そしてヨーロッパの政治情勢が怪しくなってきた30年代以降は、政治の問題に関する論考を多く残し、第2次世界大戦後にサルトルが提唱したアンガージュマンの文学が勢いを増すと、それに対抗するかのような無為の文学や神話の復活を提唱するというように、バタイユはそのときどきのアクチュアルな問題を論じる作家であった。出版までに時間を要する本より雑誌という刊行物の方がこの作家には向いていた

<sup>74</sup> Sylvie Patron, *Critique 1946-1996*, op. cit., p. 63-64.

<sup>75</sup> Francis Marmande, « D'une revue l'autre », *Les Temps Modernes*, n° 602, décembre 1998-janvier 1999, p. 41.

のかもしれない。あるいはバタイユは雑誌のなかに、現実には成功しなかった 1930 年代の共同体の試みに通じるものを感じていたと考えることも可能である。ひとくちに「書物を編む」と言っても、単著を上梓するのと雑誌を刊行するのは同じことではない。複数の人とひとつの出版物を作り上げていく作業を厭わず、バタイユが何度も雑誌の立ち上げをもくろんでいたという事実は、この作家の共同作業および共同体への嗜好の表れだと言えるだろう。

本稿では、バタイユが創刊を試みた雑誌を中心に、この作家が関わった雑誌にどのようなものがあったかを時系列に沿って概観した。第 2 次世界大戦下という非常時を除いてはぼつねに、バタイユの作家人生は何らかの雑誌の傍らにあった。バタイユが立ち上げに失敗した雑誌は、実際に創刊にまで至ったその数をはるかに凌ぐが、度重なる失敗にもかかわらず、意気投合した仲間と——あるいはひとりで——雑誌の刊行を画策し続けるそのさまは、政治や秘密結社といった共同体の創成および運営には人生の一時期しか関わらなかったことと対照的である。バタイユにとって雑誌とは、文筆活動の重要な場であると同時に、ライフワークとでも言うような、人生の一部を成す場でもあったのだ。

その一方で、そうした側面は、私たちがこの作家の雑誌論文を読み、語る際に抜け落ちてしまいがちではないだろうか。一回もしくは数回で読み切りという雑誌論文の性質上、また、ひとりの作家が書いたものをすべて収録するという全集という形式の書物の性質上、致し方のないことではあるが、全集のなかに発表年代順に素っ気なく並べられている大量のバタイユの雑誌論文を順番に読んでいだけで、テキストに込められた意味を読み取ることは難しい。この作家が雑誌にかけた情熱や、それぞれの論文の書かれたコンテキストや掲載誌の特色といった情報を知ることは、私たちがバタイユの雑誌論文の意味をより深く理解するための助けになるのである。

誌面の関係上、本稿では個々の論文の内容に立ち入ることはできなかったが、本稿で確認した視座を踏まえた上で、バタイユの雑誌論文の分析を行うことを今後の課題としたい。